

平成 20 年度から、LAF に代わり、北九州市小倉地区在住の協力者によりアウトリーチが実施されることとなり、平成 22 年度まで継続した。

平成 22 年度 12 月には、協力者の主催による MSM 向けクラブイベント「コクナイ」が開催された。LAF も協力し、来場者に対しオリジナルコンドームなどの啓発資材を配布した。

6. 行政との連携体制構築

増加を続ける MSM の HIV 感染を抑えるためには、LAF の活動だけではなく、行政においても、MSM を考慮した HIV 感染対策が講じられなければならない。そこで福岡では、医療・行政・CBO 等による連絡会議「セクシャルヘルス懇談会」を定期的で開催し、連携体制を構築しながら、エイズデーイベントでの協働など、様々な試みを行ってきた。

平成 20 年度は、福岡県・福岡市のエイズデーイベントの企画立案に参加し、11 月 29 日にファッションビル IMZ にて開催された、Love FM「AIR-STAGE 世界エイズデー福岡」において、福岡の HIV に関わる団体として、エイズ・ワーカーズ・福岡（AWF）とともに出演した。

平成 21 年度は、新型インフルエンザの流行により、セクシャルヘルス懇談会の開催が叶わず、福岡県・福岡市主催によるエイズデーイベントも開催されなかったため、協働には至らなかった。

平成 22 年は、HIV 抗体検査のエイズデー特例検査において、特に重要対象である MSM コミュニティに向けたフライヤーの作成と配布の協力をを行い、検査への受検者誘導を行った。また、福岡市中央区保健福祉センターの協力により、同センターでの即日検査の流れを撮影した検査促進のためのビデオを制作し、12 月からの 1 ヶ月間、haco にて上映を行い、来場者へ受検を促した。他にも、9 月に行われた福岡県エイズ対策推進協議会へオブザーバーとして参加し、行政の MSM に向けた HIV 感染

対策への提言を行った。

D. 考察

1. コミュニティの層別解析

層別解析を行うことより、対象を明確に定めることができるようになり、それぞれの対象に向けたプログラムを作成することが出来た。MSM に対し戦略的な予防介入を計画するにあたり、この層別解析は非常に有効であったと思われる。

2. 層別解析に基づいた戦略的予防啓発活動の展開

1) 第 3 層「インターネット利用者」を対象とした啓発活動：ホームページ開設による HIV 関連情報の提供と haco への誘導

平成 21 年度のホームページアクセス数の集計結果（図 4）を見ると、九州の MSM を対象としたポータルサイト「k@toom」からのアクセスが一番多い。さらにその月別推移（図 5）を見ると、サイト内で LAF および haco に関連したイベント等の告知を行った 6 月および 8 月～10 月は、アクセス数が格段に上昇していることが分かる。また、初来場者デーの来場者に対する聞き取りを行ったところ、その多くが k@toom を経由して LAF ホームページを閲覧し情報を得て来た、との回答しており、さらに「これまで MSM コミュニティに接したことがない」または「日ごろ接することが少ない」と回答している。

平成 22 年度 7 月に haco で開催した、コンドーム携帯用下着の展示会「ケツ割れ展」の告知後は、関心の高さからか、ホームページアクセス数が急増した（図 6）。7 月は「ケツ割れ展」を目的とした新規来場者も多く、新規来場者数の月別推移（図 7）を見ても、有意に増加していることが分かる。

このことから、啓発色を強く打ち出したものよりも、広く興味・関心を引くようなイベント等を開催し、MSM が多く利用するポータ

ルサイト等で積極的な告知を行うことで、第3層を効果的にホームページおよびhacoへ誘導可能であることが示唆された。

2) 第2層「バー/ハッテン場利用者」を対象とした啓発活動：haco 誘導プログラムの実施

誰もが一度も足を踏み入れたことのない場所には抵抗感があるものであり、コミュニティセンターのような既存概念にない場所に対してはなおさらである。来場者に対する聞き取りを行うと「hacoの存在は知っていたが、きっかけがなく来場をためらっていた。」という声が非常に多い。

展示会やイベントを開催し、手話教室やサークル等の集会などでhacoを利用してもらうことで、様々な来場へのきっかけ作りを行い、多くの来場者を誘導することができた。イベントや展示会の開催期間中における来場者数は、展示会を行っていない通常より4割から8割程多く、新規来場者数もそれに比例している。第2層を効果的にhacoに誘導し、啓発活動に接する機会を作り出せたと言える。

3) 第1層「haco 来場者」を対象とした啓発活動：haco 来場者啓発プログラムの実施

様々な勉強会やワークショップ等を開催し、haco来場者に対し予防情報の提供を行うことができた。また、平成22年度に定期的な開催を目指した勉強会「we'st」は、ほぼ毎月、継続して開催することができた。

ホームページや誘導プログラムなどにより、第3層、第2層のhaco来場を促すことはできたが、来場者に対する予防啓発は未だ試行錯誤の段階である。勉強会の開催方法のさらなる検討など、第1層への啓発をどう行うかは、今後の重要な課題である。

4) 有用性を証明された啓発の継続：オリジナル Condom とコミュニティペーパーseason

のアウトリーチ

平成20年度に行った実態調査アンケートの結果、各商業施設から継続したコンドーム設置協力の確認を得ることができた。これまでは店舗との連携体制構築という目的で、ゲイバー以外のハッテン場やホスト店へもコンドームを配布してきたが、今後はそれぞれに対するアプローチをどう展開していくか、検討が必要であると考ええる。

平成22年度に行ったバーアンケート調査において、協力店舗が、平成20年度の29店舗から42店舗へと増加した。これは、継続したアウトリーチなどの活動により、LAFの活動に対する認知と理解がより広がった結果であると言える。

平成22年度からマッサージ店へのseason配布を開始した結果、マッサージ店店主との関係性を構築することができた。これにより、これまで介入できなかった対象にseasonを通じてHIV/STDに関する情報提供を行うことができるようになった。

3. コミュニティセンターhacoの有用性の検証

hacoの開設から4年が経過し、毎月一定の来場者数を維持することが出来ている。また、平成20年度～22年度までのhaco来場者数の推移(図8)を見ると、来場者数は毎年増加している。つまり、これだけの数のMSMに対する予防介入の機会を、hacoは作り出していると言える。

また、LAFがhacoを基点に様々な活動を展開できるようになったことも、大きな利点である。開設する以前は、勉強会も街の会議室を借用し開催していた。コミュニティへのアウトリーチも、ゲイバーを時間借りして準備するなど、実施以外の労苦が伴うものであった。現在はそれら全てをhacoで行うことができるようになり、活動を行う上でのLAFの負担は、格段に軽減された。

福岡のMSMに対する予防啓発を行う上で、

haco の存在は必要不可欠であり、意義のあるものであると言える。

4. コミュニティ内での連携体制の強化

LTF の組織から「マルハク」の開催に至り、キーパーソンとの連携したイベントを開催することができた。LTF は解散となったが、マルハクはその後もキーパーソンとの協働によって継続している。

新たな試みとして開催した「RED RIBBON GAMES」では、649 名の参加者に対し行った HAPPINESS アンケートにおいて、92%である 540 件の回答を得ることができた。また「ペンタゴン」では、HIV 即日検査の告知を行い、検査推進を行うことができた。

様々なキーパーソンとの協働を行ったことで、コミュニティ内での連携体制が強化されたと思われる。

5. 北九州地域での予防啓発活動のブランチャ化

北九州市在住の協力者によるアウトリーチが開始され、定例化したことにより、目標としてきた「活動のブランチャ化」は達成されたと言える。また平成 22 年度には、協力者が単独でイベントを開催し、その中で LAF のコンドームを配布するなど、独自の活動が展開されるまでになった。

平成 22 年度に行ったバーアンケート調査において、新たに北九州市の 5 店舗の参加協力が得られた。これは、北九州市での継続したアウトリーチの実施などにより、LAF の活動に対する認知と理解を得ることができたことの結果であると言える。

6. 行政との連携体制構築

平成 20 年度は、行政と協働したエイズデーイベントを行うことができたが、平成 21 年度は、新型インフルエンザの影響で、継続して行ってきたセクシャルヘルス懇談会を開催することができなかった。この年は、他の地域

でも同様に、行政における HIV 感染対策が大幅に縮減された。結果として、HIV 抗体検査の受検者数は減少し、AIDS を発症して HIV 感染を診断される患者が増加するなど、その影響が現在まで続いている。

平成 22 年度には新型インフルエンザ騒ぎも落ち着き、セクシャルヘルス懇談会を再開し、行政との協働による特例検査を実施することができた。しかし、その特例検査の結果は、福岡市の保健所の受検者数 $46+16=62$ 名、筑紫保健所 23 名、久留米保健所の 13 名（平日の夜間では 48 名）の受検者しかなく、多くは MSM ではなかった。また、陽性判明も 0 名であった。平成 17 年の行政との協働イベント「my first safer sex 展」の際に併設して行った即日検査の受検者数、約 200 名（陽性判明 2 名）と比較しても、誘導方法が有効でなかったと思われる。この結果は、セクシャルヘルス懇談会にて反省と原因解析を行い、今後の協働において活用したいと考える。

E. 結語

本研究は平成 20 年度から 3 年間にわたり、地方都市として代表的な福岡地域における、MSM を対象とした HIV 感染予防啓発研究を行ったものである。

層別解析を元に haco をベースとした戦略的予防啓発活動を展開した結果、haco 利用者・新規来場者は、安定した数を保ちながら、年々増加している。また、キーパーソンと様々な協働を行うことによって、コミュニティと LAF との連携体制はより一層強化された。平成 20 年度と 22 年度に実施した、バーアンケート調査での参加協力店舗の増加がその傍証である。

一方で、バーアンケート調査の結果、45 歳以上の MSM は、それ以下の MSM 群と比較して、LAF および LAF が実施している各プログラム、haco の認知度が低く、また HIV 抗体検査受検率、コンドーム常用率の低さに有意差が見ら

れた。また、45歳以上で初めてHIV感染を診断された患者は、45歳未満に比較して有意にAIDS発症が多かった。45歳以上のMSMは、情報が届きにくい対象であると考えられ、そのため予防行動や検査行動も十分ではなく、結果としてAIDSを発症してから初めて感染に気づくことが多いと考えられる。今後は、45歳以上を対象とした啓発プログラムの開発も必要であると言える。

これまで行政と協働した結果、行政がMSMへのHIV感染対策の重要性を理解しはじめ、LAFに対し、福岡県や熊本県からエイズ対策推進協議会へのオブザーバー参加要請がくるようになった。これは一つの大きな進歩である。しかし残念ながら、サポート体制、支援においては未だ十分であるとは言い難い。地方コミュニティでの啓発活動から見えてくるのは、やはりボランティアだけで活動を継続していくことの限界である。今後さらに必要とされる、MSMのHIV感染対策推進のためには、活動の専従職員の人件費を含めた、資金面等における国および地方自治体のさらなる協働支援が必要不可欠であり、場合によっては、公益法人化などによる公共事業として推進していく必要性も考えられ、行政における今後の責任は非常に大きい。

早晚崩壊が危惧される地方の医療にとっても、これ以上の患者増加に対処することは困難となってきており、早急にさらなるMSM予防啓発対策推進のための施策実施が望まれる。

F. 発表論文等

(研究論文)

1) Minami R, Yamamoto M, Takahama S, Ando H, Miyamura T, Suematsu E : Comparison of the influence of four classes of HIV antiretrovirals on adipogenic differentiation : the minimal effect of raltegravir and atazanavir. *J Infect Chemother*, 2010 Aug 13.

2) Hattori J, Shiino T, Gatanaga H, Yoshida S, Watanabe D, Minami R, Sadamasu K, Kondo M, Mori H, Ueda M, Tateyama M, Ueda A, Kato S, Ito T, Oie M, Takata N, Hayashida T, Nagashima M, Matsuda M, Ibe S, Ota Y, Sasaki S, Ishigatsubo Y, Tanabe Y, Koga I, Kojima Y, Yamamoto M, Fujita J, Yokomaku Y, Koike T, Shirasaka T, Oka S, Sugiura W : Trends in transmitted drug-resistant HIV-1 and demographic characteristics of newly diagnosed patients : nationwide surveillance from 2003 to 2008 in Japan, *Antiviral Res*, 2010 Oct; 88(1): 72-9.

3) 田中沙希恵、藤野達也、堀田飛香、原田浩邦、中村辰己、高橋真梨子、高濱宗一郎、安藤仁、南留美、山本政弘 : TaqManPCR法によるHIV-1 RNA定量の基礎的研究, *国臨協九州*, 10 (1), 1-6, 2010.

4) 今村顕史, 宮川寿一, 山本政弘 : Q&A 形式 Case study, HIV感染症とAIDSの治療 *Vol11* (2), 49-59, 2010.

5) 山本政弘 : 図説 HIV感染症に生じた性感染症関連合併症の2例, *日本性感染症学会誌*, 21 (2) 78-79, 2010.

6) 平野玄竜、有田好之、喜多村祐次、山本政弘、南留美、高濱宗一郎、安藤仁、早田哲郎、向坂彰太郎 : 肝臓瘍に下大静脈血栓症を合併した一例, *超音波医学* (1346-1176) 37 卷1号 Page51 (2010.01).

(国際学会発表)

1) Minami R, Takahama S, Ando H, Yamamoto M : Some antiretroviral drugs increased the degree of steatosis in hepatitis B virus infected hepatocytes, XVIII International AIDS Conference, 18-23, July, 2010, Vienna, Austria.

(国内学会発表)

1) 高濱宗一郎、南留美、山本政弘 : AILDを合併し、SLE様症状を呈した、パルボウイルス

- ス B19 感染合併、HIV 感染症の一例, 第 24 回日本エイズ学会学術総会, 平成 22 年 11 月 24 日, 東京.
- 2) 川本大輔、宮代守、樋脇弘、高橋真梨子、南留美、山本政弘: 福岡地域で得られた HIV の免疫耐性, 第 24 回日本エイズ学会学術総会, 平成 22 年 11 月 24 日, 東京.
 - 3) 渡邊大、伊部史朗、近藤恭子、上平朝子、南留美、笹川淳、矢嶋敬史郎、米本仁史、坂東裕基、小川吉彦、谷口智宏、笠井大介、西田恭治、山本政弘、金田次弘、白阪琢磨: 残存ウイルス量測定 of 臨床的意義について, 第 24 回日本エイズ学会学術総会, 平成 22 年 11 月 24 日, 東京.
 - 4) 吉田繁、千葉仁志、小池隆夫、佐々木悟、伊藤俊広、内田和江、原孝、佐藤武幸、上田敦久、石ヶ坪良明、近藤真規子、今井光信、長島真美、貞升健志、古賀一郎、太田康男、山元泰之、福武勝幸、加藤真吾、藤井毅、岩本愛吉、西澤雅子、仲宗根正、岡慎一、伊部史朗、横幕能行、上田幹夫、大家正義、田邊嘉也、渡辺香奈子、渡邊大、白阪琢磨、小島洋子、森治代、中桐逸博、高田昇、木村昭郎、南留美、山本政弘、松下修三、藤田次郎、健山正男、杉浦互、服部純子、椎野禎一郎、瀧永博之、林田庸総: 2000-2009 年の新規 HIV/AIDS 診断症例における薬剤耐性頻度の動向, 第 24 回日本エイズ学会学術総会, 平成 22 年 11 月 24 日, 東京.
 - 5) 牧園祐也、請田貴史、川本大輔、北村紀代子、狭間隆司、濱田史朗、橋口卓、山本政弘、井上緑: 福岡地域における男性同性間の HIV 感染対策とその推進 CBO「Love Act Fukuoka (LAF)」の啓発活動の展開とコミュニティセンター haco の有用性について, 第 24 回日本エイズ学会学術総会, 平成 22 年 11 月 24 日, 東京.
 - 6) 大石裕樹、安藤仁、高橋昌明、高濱宗一郎、南留美、石橋誠、山本正弘: EFV, TDF/FTC の大量服用後の薬物血中動態について, 第 24 回日本エイズ学会学術総会, 平成 22 年 11 月 24 日, 東京.
 - 7) 渡邊大、上平朝子、白阪琢磨、横幕能行、濱口元洋、南留美: 急性 HIV 感染症の入院 37 症例の検討, 第 24 回日本エイズ学会学術総会, 平成 22 年 11 月 24 日, 東京.
 - 8) 南留美、高濱宗一郎、長与由紀子、城崎真弓、辻麻理子、山本政弘: 第 24 回日本エイズ学会学術総会, 抗 HIV 療法施行中に血管免疫芽球性 T 細胞リンパ腫を併発した HIV-1 感染症例, 平成 22 年 11 月 24 日, 東京.
 - 9) 鈴木智子、田村恵子、須貝恵、辻典子、小塚雅子、井内亜紀子、濱本京子、井上緑、矢永由里子、濱口元洋、山本政弘: 拠点病院診療案内の作成効果の検討その 1-利用者背景と活用状況の分析, 第 24 回日本エイズ学会学術総会, 平成 22 年 11 月 25 日, 東京.
 - 10) 鈴木智子、田村恵子、須貝恵、辻典子、小塚雅子、井内亜紀子、濱本京子、井上緑、矢永由里子、濱口元洋、山本政弘: 拠点病院診療案内の作成効果の検討その 2-拠点病院の回答から今後の課題へ, 第 24 回日本エイズ学会学術総会, 平成 22 年 11 月 25 日, 東京.
 - 11) 辻麻理子、南留美、高濱宗一郎、城崎真弓、長与由紀子、本松由紀、石川謙介、本田慎一、早川宏平、山本政弘: 当院における就労問題に対するカウンセリングによる取り組み, 第 24 回日本エイズ学会学術総会, 平成 22 年 11 月 25 日, 東京.
 - 12) 増田香織、池本美智子、長與由紀子、城崎真弓、高濱宗一郎、南留美、山本政弘: 当院における HIV 感染患者に対する栄養指導の現状と効果について, 平成 24 回日本エイズ学会学術総会, 平成 22 年 11 月 24 日, 東京.

【付表1】コミュニティセンター誘導プログラム（イベント/貸し出し）実績

平成 20 年度		
開催日	タイトル	来場者数
4月24日	茶匣	16 (1) 名
10月11日	CDTV3	49 (7) 名
11月29日	映画「RENT」上映会	16名
1月18日	英会話教室「cozy」第1回	7名
2月15日	英会話教室「cozy」第2回	16 (6) 名
平成 21 年度		
4月14日	マルハク説明会	31 (26) 名
7月4日	七夕ライブ「星に願いを」	7 (1) 名
7月14日	LTF ミーティング	5名
7月18日	ぼんてくライブ	5 (2) 名
7月28日	LTF ミーティング	4名
9月19日	ビューティートーク	5 (1) 名
10月31日	手話教室「FGSC」第1回	9 (7) 名
11月28日	手話教室「FGSC」第2回	12 (4) 名
12月7日	LTF ミーティング	5名
12月26日	手話教室「FGSC」第3回	10 (3) 名
1月16日	手話教室「FGSC」第4回	14 (2) 名
1月20日	RED RIBBON GAMES・マルハク説明会	33 (9) 名
2月6日	HUG たいそう	12 (1) 名
2月20日	手話教室「FGSC」第5回	21 (8) 名
3月6日	手話教室「FGSC」第6回	19 (4) 名
3月20日	CDTV4 feat うどんカフェ	60 (16) 名
平成 22 年度		
4月24日	手話教室「FGSC」第7回	21 (2) 名
5月1日	ゲイバーはじめて物語	2 (1) 名
5月19日	手話教室「FGSC」第8回	21 (1) 名
5月29日	Bar ARROWS ダンス練習	5名
6月19日	手話教室「FGSC」第9回	19名
6月27日	Bar ARROWS ダンス練習	4名
6月29日	THE PENTAGON ミーティング	4名
7月7日	THE PENTAGON ミーティング	4名
7月10日	手話教室「FGSC」第10回	34 (8) 名
7月13日	Bar DUNGAREE ダンス練習	5名
7月14日	THE PENTAGON ミーティング	4名
7月25日	にじだまり	11 (4) 名
8月21日	手話教室「FGSC」第11回	26 (2) 名
9月25日	手話教室「FGSC」第12回	17名
10月2日	手話教室「FGSC」第13回	21名
10月30日	手話教室「FGSC」第14回	21 (2) 名
10月31日	けんし会	17 (3) 名
11月7日	にじだまり	8 (3) 名
11月27日	手話教室「FGSC」第15回	14名
12月11日	ケボラジ vol, 1	31 (2) 名
12月19日	にじだまり	10 (2) 名
12月25日	手話教室「FGSC」第16回	18 (1) 名

※ () 内は新規来場者数

コミュニティセンター誘導プログラム（展示会）実績

平成 20 年度		
期間	展示会名	期間中来場者数
7月25日～ 8月17日	競パン写真展	92(27)名
8月23日～ 9月21日	岩田巖画展	112(20)名
10月24日～ 11月23日	Loner 展	142(10)名
平成 21 年度		
5月1日～ 5月6日	Living Together×マルハク みんなのTシャツ展	106(12)名
9月6日～ 10月4日	ぼんてくてん	103(24)名
10月10日～ 11月10日	Taku 庵落描展	156(28)名
2月7日～ 3月7日	九州女装連合展	189(30)名
平成 22 年度		
4月2日～ 4月24日	Sound Summit 展	153(8)名
4月30日～ 5月29日	SCENE -僕らのゲイコミュニティ写真展-	156(19)名
5月20日～ 6月26日	やっぱ愛ダホ (idaho) ! in 福岡 メッセージ展	192(14)名
7月2日～ 8月1日	LAF×PillowTalk ケツ割れ展	200(28)名
8月8日～ 9月5日	「+であること」HIV 陽性者手記展	128(13)名
9月17日～ 10月10日	「隆」イラスト展	144(16)名
12月3日～ 12月25日	ピシャ子「ピシャーっと検査に行ってみんね！」 上映	126(11)名

※（ ）内は新規来場者数

【付表2】コミュニティセンター来場者啓発プログラム(勉強会)実績

平成 20 年度		
開催日	タイトル	来場者数
8月16日	「Talk」 vol,1	4名
9月13日	「Talk」 vol,2	4名
平成 21 年度		
5月24日	ワークショップ「my life」 vol,1	7(1)名
6月28日	ワークショップ「my life」 vol,2	5名
8月23日	ワークショップ「my life」 vol,3	5名
9月12日	REACH Online 2008 報告会	5(1)名
9月19日	Dr. YAMAMOTO の生で聞いてよっ	7名
9月20日	コンドーム試着室 vol,1	10名
11月7日	コンドーム試着室 vol,2	10(2)名
1月30日	「Do なる? HIV」 vol,1	4名
平成 22 年度		
4月16日	「we'st」 vol,1 -梅毒について-	3名
5月14日	「we'st」 vol,2 -クラミジアについて-	5名
6月18日	「we'st」 vol,3 -肝炎について-	3名
7月16日	「we'st」 vol,4 -肝炎 P a r t 2-	3名
7月30日	「コンドーム会議室」 -ゴムフェラ、してる?-	7名
8月27日	「we'st」 vol,5 -HIV に感染してから-	7名
8月28日	「Do なる? HIV」 v o l , 2	14(3)名
9月17日	「we'st」 vol,6 -HIV ヒストリー1-	6(2)名
10月15日	「we'st」 vol,7 -HIV ヒストリー1-	4名

※ () 内は新規来場者数

沖縄地域における男性同性間の HIV 感染予防介入研究

－沖縄県の男性同性愛者の HIV 検査受検率向上のための調査－

研究分担者：健山正男（琉球大学大学院・感染症・呼吸器・消化器内科学）

研究協力者：宮川桂子（沖縄県中部福祉保健所）、仲村秀太、田里大輔、日比谷健司、
原永修作、比嘉 太、藤田次郎（琉球大学大学院・感染症・呼吸器・消化器内科学）、
宮城京子（琉球大学医学部附属病院看護部）、仲宗根 正（沖縄県中央保健所）、
椎木創一（沖縄県立中部病院）、仲程ひろみ、nankr、
嘉数光一郎（沖縄県立南部医療センター・こども医療センター）、
塩野徳史（名古屋市立大学看護学部/財団法人エイズ予防財団）

研究要旨

目的：

HIV 受検者および非受検者にアンケート調査をおこない、HIV 検査の受検環境改善策を検討する。年度毎に次の目的を設定した。

前期（H21、22 年）：男性同性愛者（MSM）の個別施策層における検査回避の要因をアンケート調査してその改善策を検討する。副目的として男性同性愛者（以下：MSM）のみを対象とした日曜日 HIV スクリーニング検査を実施し、無症状のキャリアーを早期発見して医療機関につなぐことを目的とした。

後期 H22 年（2、10 月に 2 回実施）：ゲイバーの顧客を対象に HIV 感染リスク、HIV 受検行動についてアンケート調査を行なった。

研究方法：

研究 1：H21、22 年に沖縄県内の MSM を対象に、日曜検査会場を設営し、HIV および HIV 以外の性感染症の浸淫度を調査した。また事前にアンケート調査により、検査環境を改善した様々な施策を実施し、どの施策が最も検査受検率の向上に有用かを受検者へのアンケートにより検証した。

研究 2：H22 年に県内のゲイバーの顧客を対象に、HIV 受検行動調査、受検しやすくなるための要因、リスク行動の有無、ゲイバーでの HIV 予防活動の受け取り方、HIV 受検回避理由についてアンケート調査を行なった。

結果：

研究 1：H21、22 年に実施された中央保健所での MSM のみを対象とした HIV 検査の受検者数はそれぞれ 80 人（日曜検査のみ 46 人）、58 人、合計 138 人であった。アンケート回収率は 98.2%であった。検査回数は 1 回以下が 46%を占めた。検査会場でのアンケート調査では検査会開催の情報入手はネットおよび MSM 向け商業施設で 75%と最も多かった。ゲイバーでの HIV 関連資材の提供について 86%が積極的に支持した。STD 検査の無料実施および MSM のみに特化した検査会の開催が受検動機の最多の回答数を得た。

研究 2：H22 年 2 月度の MSM 向けの商業施設でのアンケート調査は 111 件の有効回答を得た。HIV 検査経験の有りは 50%であった。HIV 検査を受けやすくする要因として、①プライバシーの確保 ②受けやすい曜日・時間の設定 ③当日検査結果が分かること ④他の性感染症の検査が無料で

受けられることが挙げられた。ゲイバーでの HIV 予防啓発活動は 95%の顧客に好意的に受け取られていることが分かった。コミュニティーレベルでのリスク行為の有無と HIV 検査の受検行動の関連では検査を必要とするリスク行動の高い人に受検経験者の割合が低かった。

H22 年 10 月度アンケート調査は 342 部 (51%) であり、他の福岡、名古屋地域より低かった。

利用するサイトは地域の出会い系サイト、mixi、PC 系サイトの順に高かった。HIV 感染に対する知識は正答率は 50%程度であった。HIV は比較的身近に意識している傾向が認められた。性感染症の罹患率が 40%と高かった。nankr の知名度は 7 割強と高かったが、HP については 3 割程度と低かった。mabui の訪問率は 3 割であった。HIV 検査の受検意識は高いが、実際の受検率は 40 代以下では 20%程度低かった。セーフセックスの割合は 2 割で、年齢が高くなるほど性交渉人数が増加傾向であった。受検回避の理由は、感染の可能性がない、機会がなかった、結果への恐怖の順であった。

考察：

研究 1：日曜検査会は 1 回のみで開催で 4 回開催した前回の受検者数を上回った。日曜日開催のための医療従事者の確保が困難な状況を勘案すると、検査日を増やすことなく周知法の改善策をはかることで持続可能な検査体制が確立できることが実証された。

研究 2：MSM 向けの商業施設におけるアンケート調査では検査受検に対して多様な意見があり、検査機会を複数の選択枝から選択できる体制を提供することが必要と思われた。ゲイバーでの資料提供と HIV 予防啓発活動は大多数に支持されることが判明した。感染リスクの高い行為が常態化しているが、その原因として、知識・認識不足および HIV 感染に対する実感はあるが、行動変容が得られていない。今後はこの群に対する効果的なプログラム開発が必要である。

結語：

1. MSM のみを対象とした HIV 検査会は開催日を増やすよりも広報に主眼をおいて 1 回でも十分に受検者数を増加することができる。
2. HIV 検査を受けやすくする要因として、①プライバシーの確保 ②受けやすい曜日・時間であること ③迅速検査で当日結果が分かること ④他の性感染症の検査が無料で受けられることが挙げられる。
3. 感染リスクの高い行為群の行動変容が得られていない。今後はこの群に対する効果的なプログラム開発が必要である。

本研究は厚生労働省エイズ対策研究事業として実施し、沖縄県中央保健所の全面的協力を得て施行した。

研究 1：HIV 日曜検査会開催と検査回避の要因調査

A. 研究 1 の目的と背景

沖縄県における HIV 感染者の増加は H10 年より顕著となり、H19 年の人口 10 万人あたりの新規感染者は 2.58 人と全国で 2 番目に高い陽性率となった。以後 H21 年まで全国 3 位以内を占め、その 85%以上を MSM が占める。AIDS の届出は全体の 30%であるものの、治療開始基準となる CD4 陽性 T リンパ球が

350cells/μL 未満が全体の 83%であり、HIV と行政的に区分されても病期が進行して発見される例が多いことが判明した。

以上より、沖縄県における HIV 感染の増大は大部分が MSM 間で起きており、病期の進行した症例が大多数を占めていることが明らかとなり、MSM における検査受検率を現状よりも高めて、感染者を速やかに医療機関へとつなぐことが喫急の課題と言える。さらにこれらの個別施策層における検査回避の要因を明

らかにすることも求められる。

これらの背景から、H21-22年の2回、沖縄県内のMSMを対象に、HIV検査会を実施し、参加者に効率的な検査会開催のためのアンケート調査を行った。

B. 研究1の方法

1. 組織

実施者は、日常HIV-1感染者診療および検査に携わる医師、看護師、検査技師で構成した。

琉球大学医学部附属病院 医師、看護師

南部医療センター 看護師

中部病院 医師

沖縄中部福祉事務所 医師

沖縄県中央保健所 保健師、検査技師

2. 受検対象者

自らの意志で来所しMSMであること、およびHIV検査受検希望を書面にて回答したもの。

3. 研究期間

平成21年2月1日～同28日午前11時～午後5時

平成22年1月31日（日曜日）午前11時～午後5時

4. 実施場所

沖縄県中央保健所

5. 実施方法

1) 広報活動

沖縄県男性同性愛者 HIV 予防啓発団体（nankr）のネットワークを中心として、男性同性愛者対象の商業施設への広報誌配布、インターネット等を使った情報発信、携帯電話出会い系サイト、口コミなどを伝搬手段とした。

2) HIV検査の実施方法

電話での予約制。（中央保健所感染症担当が担当）

6. 検査項目

1) 抗HIV抗体、2) 抗クラミジア・トラコマティス抗体、3) HBsAb, HBsAg、4) 抗HCV抗体、5) 抗TPL抗体・抗カルジオリピン抗体。

7. アンケート内容

1) MSM調査対象は検査受検時にMSMと回答した者の中で、アンケート調査に協力を得られた126名を対象とした。

C. 研究1の結果

1. HIV検査会

1) HIV検査受検者数

H21年度は研究期間内にHIV検査会を4回開催し、週を重ねる毎に受検者は増加し、最終的に男性141件中、MSM79人、MSM以外62人が受検した（図1）。MSM79人中、日曜検査：46人、平日：33人が受検した（図1）。

H22年度はHIV検査会は1回開催し、検査受検者数は58人であった。

過去4年間の同保健所における年間のMSMのHIV受検者数の平均は119.5人であることから、本研究の2年間の日曜検査で年間受検者数の44.5%を占め、月別では統計の確認できるH18年の2月の4.6倍の増加であった（図2）。

2) Sexually Transmitted Infections (STI) 感染率

2年間合計で感染者はHIV：1.9%、梅毒18.1%、抗HBs抗原0%、抗HBs抗体31.7%、抗HCV抗体0%であった。

2. HIV日曜検査受検者のアンケート解析

1) 受検回数

H21年度調査では過去の検査受検歴では65%が有り、最多は1回で21.5%で、以後検査回数の増加と共に減少した。H22年度では初回検査は17.5%で前年度と同様であり、2回以下の検査回数受検者は全体の70.2%であった。

2) 望むべき検査会のあり方に関する質問群

ア) 検査会開催情報の入手先（複数回答）に関しては、利用手段はネット関連が最も高くH21年度は57%、H22年度43.9%、次いで友人・知人とハッテン場やゲイバーなどMSM対象の商業施設が19%、29%であった。検査案内状のみとしたのはいなかった。

携帯サイトと検査情報をリンクした地元のゲイコミュニティ nankr のホームページへの1日平均アクセス数がH21年度は17人/日から90人/日へと急激な伸びを示し、H22年度は124人/1日へと増加していた。

3) 受検者が望む検査環境調査（複数回答）

「HIV以外のSTD無料検査」と「日曜・祭日の検査」が最も多く、各19%であった。続いて「平日夜間の検査」、「結果返しが当日」と続いた。今回の「MSMのみの検査会と広報」は5位（11%）であった。「検査前後でのカウンセリング」を希望するも6位（9%）認めた。今回初めての試みである「検査担当者の氏名掲示」は1人のみであった。続いて、最も優先順位の高い希望を問う質問（単一回答）では「MSMのみの検査会と広報」が2位となった。複数回答では2位であった「検査返しが当日」が最下位となった。

4) 沖縄県におけるHIV感染状況の認識に関する質問群

沖縄県におけるHIV陽性者の頻度の高さについて正しく認識していたのは70.3%であった。感染経路は同性間が最も多いことを認識していたのは81.5%であった。友人・知人にHIV陽性者がいるかについては26.6%にいたるとの回答が得られた。HIV感染が身近な問題として認識しているのは「強く思う」、「有る程度思う」と合わせると96.9%であった。

D. 研究1の考察

1. HIV日曜検査会

2年間の研究で得られた結果から、多数の受検者を参加させることができた要因として、MSMのみがアクセスする媒体、当事者による口コミ広報、検査環境の整備（ニーズの把握）の3条件が有機的に組み合わさって達成されたものと推定された。

MSMの受検率の向上には、STIの無料検査が重要であること、日曜祝祭日の開催も重要なニーズがあることも前回の調査で判明し、引き続きSTI検査とリンクして開催したことも

多数の受検者の確保に役だったと推察された。

H21年度は4回開催したが、日曜日のみを受検者数合計は46人で、H22年度は1回のみの開催で前回は上回った。日曜日開催のための医療従事者の確保が困難な状況を勘案すると、検査日を増やすことより、アンケート調査で得られた検査会の開催方法や周知法の改善策をはかることが持続可能な検査体制確立のために必要と思われた。

研究2：ゲイバーにおけるHIV受検行動に関するアンケート調査

A. 研究2の目的

県内のゲイバーの顧客を対象に、HIV受検行動調査、受検しやすくなるための要因、リスク行動の有無、ゲイバーでのHIV予防活動の受け取り方、HIV受検回避理由についてアンケート調査を行い今後のHIV検査体制、予防活動のプログラム作成資料とした。

B. 研究2の方法

1. 組織

琉球大学医学部附属病院 医師

沖縄県立中部福祉事務所 医師

nankr

名古屋大学

2. 実施場所

県内のゲイバーの経営者で、協力が得られた2月に8か所、10月に31カ所に依頼した。

3. 調査期間

H22年1月25日～29日

H22年10月29日からH22年11月28日

4. 実施方法

調査期間中にオーナーから顧客にアンケートを依頼、同意を得られた人にアンケートを記載してもらおう。アンケート回収に際しては、一枚当たりバー経営者へ1000円の謝金を払い、そのうち500円をドリンク券として回答者に還元してもらおうよう依頼した。

5. アンケート内容

本研究にて独自に作成した。原則として5段階スケール評価を採用した。質問は下記の5群で構成した。

- 1) 回答者属性、2) HIV 検査経験と回数、3) HIV 検査会受検希望の有無、4) 受検のための重要な要素、5) 受検のための重視する環境。
- 6) 性行動歴

C. 研究2の結果

1. H22年度2月実施アンケート調査

協力を得られた商業施設は8店舗で、アンケート回収数は115件であった。そのうち、女性を除くと113件であった。

1) 回答者属性

年代は30代、次いで40代が多かった。

2) HIV 検査経験及びその結果について

46%がHIV検査を受けたことがないと回答した。

3) 今回のHIV検査会受検希望の有無。

受検の希望の有無の設問に対し、「受けてみたい気がする」と回答した者が37名(34%)であった。

4) 受検のための重要な要素。

「受けやすい曜日・時間である事」が一番多く85名、次いで、「当日結果がわかること」が69名、「無料の性感染症検査が含まれること」が54名と続いた。一方、「同性愛者のみを対象とすること」や、「保健所以外の場所であること」、「自分の性行動による(コンドームをつけない気になるセックスがあれば受けようと思う。そうでなければ受けないだろう。)」などは重要とされる頻度は低かった。

5) 受検のための重視する環境。

バーの近くで検査が受けられるとした場合に、受ける条件として重要だと思われることを選択肢から3つ選んでもらった。結果は、「プライバシーが守れること」が一番多く90名、次に「その日のうちに結果が分かること」が60名、「無料の性感染症検査が含まれること」が50名となった。

6) ゲイバーでの資材提供に関すること。

HIV やその他の性感染症予防のための啓発資材やコンドームを置くなどの活動がおこなわれることについてどう感じるかを聞く設問には、64人(60%)が「積極的にすべき」、23人(22%)が「当然あっていい」、13人(12%)が「特に気にならない」と、合計で100人(94%)が好意的にとらえていることが判明した。

7) リスク行動とHIV受検状況

アナルセックスでコンドームを「使用しなかった」21人のうち、HIV検査を受けたことがある人は9人(43%)、コンドームを「使用した」55人のうち、HIV検査を受けたことがある人は37人(67%)であった。

また、過去一年間のパートナーの数と受検行動の関係は上記のような分類では差がなかった。

2. H22年度10月実施アンケート調査

1) アンケート回収率

ゲイ向け商業施設36店舗に調査協力を依頼し、調査協力の同意が得られた31店舗及び、nankr(なんくる)が運営しているコミュニティセンターmabui(まぶい)において940部の質問紙配布を依頼し、実施期間中に671部配布し、342部回収された。回収率は51%(342/671部)、有効回答者数256人。

2) 回答者の属性

有効回答者数は256人で、29歳以下は56人(23.0%)、30-39歳は109人(42.6%)、40歳以上は88人(34.3%)であった。セクシャリティの自認はゲイを自認するのが85.0%であり、次いでバイセクシャルが13%であった。

3) 利用施設とツールに関する事項

過去6ヶ月間の利用施設ではゲイバーが96.9%で、有料のハッテン場、その他のハッテン場の順であった。サイト利用率は若年層ほど活発に利用していた。県内の掲示板情報へのアクセスは40歳未満は80%を超える利用率であった。

4) STI に関する事項

全体で 38%が SIT の既往歴があり、年代が高くなるにつれて既感染率が高まった。SIT の種類は毛ジラミ、梅毒、クラミジア、B 型肝炎が多く、5 番目に HIV がランクされていた。

5) HIV および STI への関心事項

これらに関する知識を確認するテストでは正答率は 50%程度で年代間で有意差は認めなかった。

HIV 感染への関心度に関しては 6 割がある、ゲイバーでの HIV 関連の話題の経験は 30%前後あると回答した。

6) プログラム認知に関する質問事項

nankr の認知度に関しては 70%強が認知しており、年代別群で有意差は認めなかった。ホームページについては 30%が既知であったが、利用は 1/3 に留まっていた。nankr が配布している「コミュニティペーパー」は 70%が既知で 50%が読まれていた。一方、nankr が配布しているコンドーム資材の認知度は 85%強であり、持ち帰りも 60%と年代に関係なく浸透していた。

沖縄コミュニティセンター「mabui」の認知度は開設 1 年未満であるが 70%と高いものの利用率は 20%未満であり、年代群で利用率に差を認めた。

7) 性行動の実態に関する事項

コンドームを使用しないアナルセックスは 8 割強が経験していた。過去 6 ヶ月間に限定して、半数以上が 5 人以上とセックスをしていた。同期間に 60%がコンドームを非常用していた。また半数がその場限りの相手とのアナルセックスをした経験があった。不特定相手とのコンドーム使用状況は 37%が非常用であり、29 歳以下の群で高くなる傾向があった。セックスドラッグは 29 歳以下の群で 17%が使用経験を有していた。過去 6 ヶ月間でコンドームの購入経験のある者は全体の 1/4 であった。また、コンドームを必要時に使用できるよう携帯しているのは 40%であった。

8) HIV 検査に関する事項

43%が HIV 検査を受けたことがなく、年齢が 29 歳以下群と 40 歳以上の群では 10%の乖離が認められた。HIV 検査の受検施設は保健所・保健センターが最多で 8 割を占めた。研究 1 で開催した日曜検査の受検率は 7.0%であった。利用しやすい検査場所として、保健所・保健センターが最多であったが、HIV 検査施設嗜好指数＝利用しやすい回答数/利用しにくい回答数とすると、どの年齢でも日曜検査との差は無く、病院、クリニックは 0.1～0.2 と利用しにくい傾向は明らかとなった(図 4)。6 ヶ月以内の HIV 検査の受検意思が明確なのは 25%であり、明確でない受検希望者を合計すると 75%に受検意思が確認された。受検回避の理由は、感染の可能性がない、機会がなかった、結果への恐怖の順であった。

D. 研究 2 の考察

ゲイバーアンケート調査

HIV 検査受検行動については、検査経験有りが 50%であった。これは、研究 1 で判明した実際に HIV 日曜検査に来所する受検行動をとった群では 82.5%が過去に検査経験があり、HIV 検査はリピーターが大多数を占めている。今回のアンケート回答者群は受検行動が少ない群といえる。

夜ゲイバーの近くで HIV 検査が出来る場合の重要な要素に関する問いに対しては、「プライバシーが守れること」「受けやすい日時であること」「無料の性感染症が含まれること」「その日のうちに結果が分かること」の 4 点があげられる。ゲイのみを対象とした検査会には行きたくない、と感じる人がいるのは当然であり、一方で、ゲイのみの検査会であるから安心できる、という人もいる。どちらの人にも受けやすい検査機会を選択できる体制を提供できることが必要である。

今回のアンケートの主な目的の一つである、コミュニティレベルでのリスク行為の有無と HIV 検査への受検行動の関連では、2 年間

の調査では、一貫として検査を受けるべきリスク行動のある人に受検経験者の割合が低いことが分かった。

ゲイバーでの HIV やその他の性感染症予防のための啓発資材やコンドームを置くなどの活動をするに対しては、ほとんどの人が好意的であった。H22 年 10 月調査でも NANKR が配布しているコンドーム資材の認知度は 85% 強であり、持ち帰りも 60% と年代に関係なく浸透していた。

H22 年度 10 月のアンケート調査の回収率は同研究を実施している博多地域、名古屋地域に比較して有意に低かった。理由としては地方の特殊性としてプライバシー情報の開示に抵抗があることが予想された。若年者ほどバイセクシャルを自認する割合が高く、沖縄県内では HIV 感染者はほぼ MSM に限定されているが、今後は女性への感染率も高まることが危惧される。利用施設はゲイバーでの調査なのでゲイバーが高いのは当然であるが、有料のハッテンバの割合も 1/3 を占めており、この施設に対する予防啓発プログラムの必要性も表面化した。出会いのための電子情報ツールは 2 月度調査と同じく若い年代ほど活発に利用され、この群に対しては効率的な予防啓発プログラムの提供の可能性があるが、40 歳以上の群では、アナログ的な手法が必要と思われる。

H22 年度 10 月のアンケート調査は、母集団を 3 倍に拡大して行ったが、STI 罹患歴も 4 割と同様に高く、そのような背景から、HIV は半数以上が現実的な問題として意識している傾向が認められた。しかしながらコンドームを常用しないセックスの割合は初対面の相手でも 5 割を占めている。4 割が 6 ヶ月間での性交渉相手が 5 人以上と活発な性活動を行っており、本県における MSM に限局した患者の発生を裏付けると考えられる。

H22 年 10 月アンケート調査で県内におけるセックスドラッグの使用実態が初めて明らかになった。静注薬物使用者は認めなかったが、

場の安全の担保に不安があるアンケート調査の限界を示している可能性がある。

nankr の知名度は 7 割強と高かったが、HP については 3 割程度と低かった。コミュニティペーパー nankr の認知率は 7 割と高く、5 割が読まれている結果を得たことは本誌が重要な情報媒体になり得ることを示した。また、研究班提供資材であるコンドームは 85% が認知しており、持ち帰りも 60% と年代に関係なく浸透していたことは、nankr の主要活動である資材を通じた啓発プログラムの周知活動は効果的であることを示唆している。mabui の訪問率は 16% にとどまっているが、認知度は 6 割であった。しかしながら利用層は若年群に偏っており、この点の改善が課題となる。

HIV 検査の受検意識は高いが、実際の受検率は 40 代以下では 20% 程度低かった。

セーフセックスの割合は 2 割で、年齢が高くなるほど性交渉人数が増加傾向であった。受検回避の理由は、感染の可能性がない、機会がなかった、結果への恐怖の順であった。

H21-22 年に本研究班で実施した日曜検査の受検者数は年間の保健所での MSM 受検者の半数以上を占めている。このアンケートでは HIV 受検率は 43% に達している一方で、日曜検査の受検率は 7.0% であった。この乖離から本アンケート回答群は日曜検査で集積した母集団と異なる群と思われる。3 年間のデータ集積により日曜検査の位置づけが、受検群および非受検群の両者から得られたことは意義のあることと思われた。今回、HIV 検査施設嗜好指数を設定し、日常的なアクセスしやすい HIV 検査施設を心理的な嗜好から検討すると病院、クリニックは圧倒的にハードルが高く、保健所、MSM のみを対象とした日曜検査は保健所検査と心理的なアクセスのしやすさは遜色無かった。

E. 結語

1. MSM のみを対象とした HIV 検査会は開催日

を増やすよりも広報に主眼をおいて 1 回でも十分に受検者数を増加することができる。

2. HIV 検査を受けやすくする要因として、①プライバシーの確保 ②受けやすい曜日・時間であること ③迅速検査で当日結果が分かること ④他の性感染症の検査が無料で受けられることが挙げられる。

3. 感染リスクの高い行為が常態化しているが、その原因として、知識・認識不足および HIV 感染に対する実感はあるが、行動変容が得られていない。今後はこの群に対する効果的なプログラム開発が必要である。

F. 個人情報の管理について

1. 個人情報の紛失、流出、改ざんおよび漏洩などを防ぐため、個人情報を保有するのは研究分担者のみとし、情報管理上問題は発生しなかった。

2. 法令等の順守について

個人情報保護に関して適用される法令、国のガイドラインを熟読し順守した。

倫理診査：H21、22 年度の日曜検査会およびアンケート調査は琉球大学臨床研究倫理審査規則第 9 条の規定に基づき、承認を得た。また H22 年度 10 月のアンケート調査は名古屋市立大学看護学部研究倫理委員会より実施の承認を得た (ID 番号 08008)

G. 発表論文等

(研究論文)

1) Hibiya K, Tateyama M, Tasato D, Atsumi E, Higa F, Fujita J :The extension mechanism of pulmonary *Mycobacterium avium* infection from primary focus to regional lymph nodes, *Kekkaku*, 86 (1), 2011 (in press).

2) Teruya H, Tateyama M, Hibiya K, Tamaki Y, Haranaga S, Nakamura H, Tasato D, Higa F, Hirayasu T, Furugen T, Kato S, Kazumi Y, Maeda S, Fujita J :Pulmonary

Mycobacterium parascrofulaceum infection as an immune reconstitution inflammatory syndrome in an AIDS patient, *Intern Med*, 49 :1817-21, 2010.

3) 健山正男: 日本における HIV 診療の現況, 日本臨床細胞学会九州連合会雑誌, 41: 15-21, 2010.

4) Hideta Nakamura, Masao Tateyama, Daisuke Tasato, Syusaku Haranaga, Satomi Yara, Futoshi Higa, Yuji Ohtsuki, Jiro Fujita :Clinical utility of serum β -D-glucan and KL-6 levels in *Pneumocystis jirovecii* pneumonia, *Intern Med*, 48 : 195-202, 2009.

5) Hibiya K, Kazumi Y, Nishiuchi Y, Sugawara I, Miyagi K, Oda Y, Oda E, Fujita J: Descriptive analysis of the prevalence and the molecular epidemiology of *Mycobacterium avium* complex-infected pigs that were slaughtered on the main island of Okinawa, *Comp Immunol Microbiol Infect Dis*, 33 :401-21, 2010.

6) Hibiya K, Utsunomiya K, Yoshida T, Toma S, Higa F, Tateyama M, Fujita J: Pathogenesis of systemic *Mycobacterium avium* infection in pigs through histological analysis of hepatic lesions, *Can J Vet Res*, 74:252-7, 2010.

7) Satoshi Toma, Tsuyoshi Yamashiro^{2*}, Shingo Arakaki¹, Joji Shiroma¹, Tatsuji Maeshiro¹, Kenji Hibiya¹, Naoya Sakamoto³, Fukunori Kinjo⁴, Masao Tateyama¹, and Jiro Fujita¹: Inhibition of intracellular hepatitis C virus replication by nelfinavir and synergistic effect with interferon- α , *J Viral Hepat*, 16:506-12. 2009

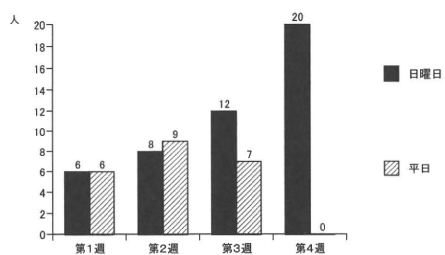
8) Hibiya K, Higa F, Tateyama M, Fujita J: The pathogenesis and the development mechanism of *Mycobacterium avium* complex infection, *Kekkaku*, 2007;82(12):903-18.

- 9) 日比谷健司、比嘉太、健山正男、藤田次郎：人獣共通感染症としての抗酸菌症, *Kekkaku*, 82:539-50, 2007.
- 10) 日比谷健司、比嘉太、健山正男、藤田次郎：Mycobacterium avium complex 感染症の病態と進展機序, *Kekkaku*, 82:903-18, 2007.
- 11) Gatanaga, Ibe S, Matsuda M, Yoshida S, Asagi T, Kondo M, Sadamasu K, Tsukada H, Masakane A, Mori H1, Takata N, Minami R, Tateyama M, Koike T, Itoh T, Imai M, Nagashima M, Gejyo F, Ueda M, Hamaguchi M, Kojima Y, Shirasaka T, Kimura A, Yamamoto M, Hujita J, Oka S1), Sugiura W :Drug-resistant HIV-1 prevalence in patients newly diagnosed with HIV/AIDS in Japan, *Antiviral Research*, 75: 75-82, 2007.
- 12) 〇健山正男、宮川桂子、仲村秀太、田里大輔、比谷健司、原永修作、比嘉太、藤田次郎、宮城京子：沖縄地域における男性同性間の HIV 感染予防介入研究，－沖縄県の男性同性愛者の HIV 検査受検率向上のための調査－，厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業，男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究，平成 21 年度総括・分担研究報告書，2010 年，p 77-88.
- 13) 〇健山正男、比嘉太、原永修作、田里大輔、仲村秀太、前城達次、山城剛、宮城京子、日比谷健司、藤田次郎：沖縄における薬剤耐性 HIV の調査研究，厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業，薬剤耐性 HIV の動向把握のための調査体制確立及びその対策に関する研究，平成 21 年度総括・分担研究報告書，2010 年，p120-123.
- 14) 〇健山正男、仲村秀太、田里大輔、比谷健司、原永修作、比嘉太、藤田次郎、宮城京子：沖縄地域における男性同性間の HIV 感染予防介入研究，厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業，男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究，平成 20 年度 総括・分担研究報告書，2009 年，p 75-82.
- 15) 〇健山正男、比嘉太、原永修作、田里大輔、仲村秀太、前城達次、山城剛、宮城京子、日比谷健司、藤田次郎：沖縄における薬剤耐性 HIV の調査研究，厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業，薬剤耐性 HIV の動向把握のための調査体制確立及びその対策に関する研究，平成 20 年度総括・分担研究報告書，2009 年，p90-93.
- 16) 〇健山正男、比嘉太、原永修作、田里大輔、仲村秀太、前城達次、山城剛、宮城京子、日比谷健司、藤田次郎：沖縄における薬剤耐性 HIV の調査研究，厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業，薬剤耐性 HIV の動向把握のための調査体制確立及びその対策に関する研究，平成 19 年度総括・分担研究報告書，2008 年，p90-93.
- 17) 〇健山正男、仲村秀太、田里大輔、比谷健司、原永修作、比嘉太、藤田次郎、宮城京子、長谷川博史、宮川桂子、嘉数光一郎、仲程ひろみ、翁長悦子、椎木創一、遠藤和郎、向井三穂子、松田奈月：沖縄の男性同性間感染による HIV 陽性者へのアンケート調査，－急増する地方 MSM 向け予防介入プログラム作成の視点から－，厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業，男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究，平成 19 年度 総括・分担研究報告書，2008 年，p 83-88.
- 18) 〇健山正男：「沖縄における薬剤耐性検査確立のための研究」「琉球大学附属病院における HIV-1 薬剤耐性検査に関する研究」厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業「薬剤耐性 HIV の発生動向把握のための検査方法・調査体制確立に関する研究」平成 16～18 年度 総括・分担研究報告書」2007 年，p171-173.
- 19) 〇健山正男：「沖縄における薬剤耐性検査確立のための研究」厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業「薬剤耐性 HIV の発生動向把握のための検査方法・調査体

- 制確立に関する研究」平成 18 年度 総括・分担研究報告書」2007 年, p 124-126 (学会発表)
- 1) 仲村秀太、健山正男、田里大輔、原永修作、比嘉太、藤田次郎：抗ニューモシスチス肺炎治療薬の変更が転帰に与える影響に関する臨床検討, 第 58 回日本化学療法学会総会, 2010. 長崎.
 - 2) 仲村秀太、健山正男、田里大輔、照屋宏充、上地華代子、仲村究、古堅誠、玉城佑一郎、原永修作、屋良さとみ、比嘉太、藤田次郎：慢性壊死性肺アスペルギルス症に Rasmussen's aneurysm を併発するもポリコナゾールで軽快した AIDS の 1 例, 第 65 回日本呼吸器学会・日本結核病学会九州支部秋季学術講演会, 2010, 熊本.
 - 3) 仲村秀太、健山正男、田里大輔、原永修作、比嘉太、藤田次郎：当院 HIV-1 感染者における骨代謝異常の有病率とその危険因子に関する検討, 日本エイズ会誌, 12:319, 2010.
 - 4) 田里大輔、健山正男、仲里愛、宮城京子、仲村秀太、原永修作、比嘉太、富永大介、藤田次郎：アドヒアランスが確保できない HIV 脳症患者へのアプローチ (1) ～ガイドライン通りにはいかない症例への HAART 導入～日本エイズ会誌, 12:419, 2010.
 - 5) 仲里愛、富永大介、田里大輔、宮城京子、仲村秀太、原永修作、比嘉太、健山正男、藤田次郎：アドヒアランスが確保できない HIV 脳症患者へのアプローチ (2) ～スクリーニング検査の限界と神経心理学検査の有用性について～日本エイズ会誌, 12:420, 2010.
 - 6) 大城市子、與那嶺敦、渡久山朝裕、平安良次、仲村秀太、田里大輔、宮城京子、健山正男：地域における陽性者交流会の試み, 日本エイズ会誌, 12:354, 2010.
 - 7) 宮城京子、石川章子、健山正男、藤田次郎：当院における HIV 看護に関する看護スタッフ教育プログラムの実践報告, 日本エイズ会誌, 12:465, 2010.
 - 8) 宮城京子、石川章子、石郷岡美穂、仲程ひろみ、嘉数光一郎、向井三穂子、椎木創一、佐久川あや子、健山正男、藤田次郎：沖縄県における自立困難患者の療養環境整備に関して, エイズ予防財団, 平成 21 年度「ケア応用編研修会」
 - 9) 健山正男：日本における HIV 診療の現況, 日本臨床細胞学会九州連合会, 特別講演, 2009.
 - 10) 田里大輔、仲村秀太、照屋宏充、原永修作、比嘉太、健山正男、藤田次郎：琉球大学医学部附属病院における Raltegravir の使用経験, 日本エイズ会誌, 11:462, 2009.
 - 11) 日比谷健司、照屋勝治、仲村秀太、田里大輔、知念寛、比嘉太、健山正男、望月誠、遠藤久子、菊池嘉、岡慎一、藤田次郎：AIDS 関連播種性 Mycobacterium avium 感染症の免疫病理分子機構, 日本エイズ会誌, 11:495, 2009.
 - 12) 照屋宏充、健山正男、日比谷健司、仲村秀太、田里大輔、原永修作、前城達次、比嘉太、藤田次郎、宮城京子：診断に苦慮した非結核性抗酸菌症, 日本エイズ会誌, 11:504, 2009.
 - 13) 仲村秀太、田里大輔、照屋宏充、原永修作、比嘉太、健山正男、藤田次郎：当院 HIV 感染男性患者における COPD の有病率とその危険因子に関する臨床的検討, 日本エイズ会誌, 11:513, 2009.
 - 14) 宮城京子、石川章子、石郷岡美穂、仲程ひろみ、嘉数光一郎、向井三穂子、椎木創一、佐久川あや子、健山正男、藤田次郎：沖縄県における自立困難患者の療養環境整備に関して, 日本エイズ会誌, 11:541, 2009. 1)
 - 15) 日比谷健司、仲村秀太、田里大輔、照屋勝治、稲垣考、小川賢二、西内由紀子、知念寛、比嘉太、健山正男、望月眞、遠藤久子、菊池嘉、岡慎一、藤田次郎：「播種性 Mycobacterium avium 感染症の病態解明—AIDS 剖検症例の解析から—」日本臨床免疫学会 Mid Winter Seminar, 2009.

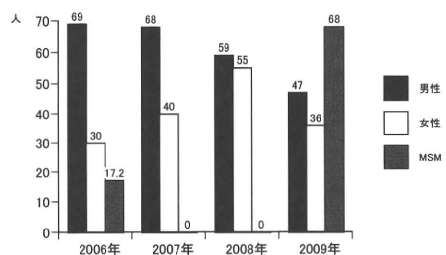
- 16) 日比谷健司、仲村秀太、田里大輔、照屋勝治、知念寛、比嘉太、健山正男、望月眞、遠藤久子、菊池嘉、岡慎一、藤田次郎：「AIDS 関連播種性 *Mycobacterium avium* 感染症の免疫病理分子機構の検討」第 37 回 日本臨床免疫学会総会，ワークショップ 2009 年。
- 17) 日比谷健司、照屋勝治、仲村秀太、田里大輔、知念寛、比嘉太、健山正男、望月眞、遠藤久子、菊池嘉、岡慎一、藤田次郎：「AIDS 関連播種性 *Mycobacterium avium* 感染症の免疫病理分子機構」第 23 回日本エイズ学会総会，2009 年。
- 18) 健山正男：地方中核拠点病院における HIV 診療の取り組み—2007 年 HIV/AIDS 比率全国 2 位の沖縄県からの報告—，ランチョンセミナー，日本エイズ会誌，10:260，2008。
- 19) 前田憲昭、溝辺淳子、吉川博政、山本政弘、健山正男、砂川元、新垣敬一、中川由美子：沖縄県における歯科医療体制構築に関する活動報告，日本エイズ会誌，10:459，2008。
- 20) 前城達次、宮城京子、仲村秀太、原永修作、比嘉太、健山正男、藤田次郎：硫酸アタザナビルによるビリルビン上昇に対するウルソデオキシコール酸投与の効果に関する検討，日本エイズ会誌，10:487，2008。
- 21) 宮城京子、健山正男、大城市子、石郷岡美穂、松茂良揚子、諸見牧子、謝花万寿子、石川章子、田里大輔、仲村秀太、真栄城達次、原永修作、比嘉太、藤田次郎：県内離島病院の診療体制構築に向けての出張研修の成果，日本エイズ会誌，10:489，2008。
- 22) 杉浦互ほか：2003-2007 年の新規 HIV-1 感染者における薬剤耐性頻度の動向，日本エイズ会誌，10:545，2008。
- 23) 仲村秀太、田里大輔、原永修作、比嘉太、健山正男、藤田次郎：HAART 導入後に免疫再構築症候群として肺サルコイドーシスを発症した一例，日本エイズ会誌，10:557，2008。
- 24) 健山正男：教育セミナー「HIV 関連非感染性肺疾患」，第 61 回日本呼吸器学会九州支部学術講演会，2008。
- 25) 當間智、山城剛、伊禮史朗、小橋川ちはる、渡辺貴子、井濱康、上間恵理子、富盛宏、仲村将泉、前田企能、前城達次、岸本一人、仲本学、平田哲生、金城渚、外間昭、佐久川廣、金城福則、健山正男、藤田次郎：C 型肝炎ウイルス増殖に関する HIV Protease Inhibitor の作用。第 49 回日本消化器病学会総会，日本消化器病学会誌，104，A684，2007。
- 26) 田里大輔、仲村秀太、那覇唯、原永修作、比嘉太、健山正男、藤田次郎：ST 合剤による 2 次予防中に再燃をきたした AIDS 合併ニューモシス肺炎の一例—免疫再構築症候群と日和見感染症再燃の異同について—，日本エイズ会誌，9:518，2007。
- 27) 宮城京子、健山正男、諸見牧子、松茂良揚子、石郷岡美穂、大城市子、石川章子、田里大輔、仲村秀太、比嘉太、藤田次郎：離島病院の医療体制構築に向けて，日本エイズ会誌，9，548，2007。

図1 2009年度HIV検査受検者の週毎の推移



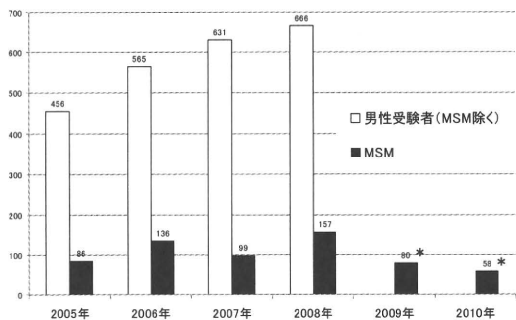
第4週は平日検査は研究期間外なので含まれていない

図2 4年間にわたる2月度の受検者数の推移



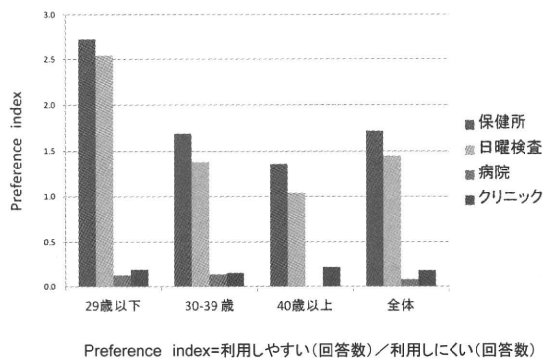
2007、2008年のMSMの割合は未集計のため記載無し

図3 中央保健所の男性およびMSMのHIV検査受検者数の年次推移



* 2009年および2010年は日曜検査のみ集計

図4 HIV検査施設の嗜好指数



Preference index=利用しやすい(回答数)/利用しにくい(回答数)